

〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ24

# 国宝 円文螺鈿鞍の三懸

日本風俗史学会会長 齋藤 慎一  
前青梅市文化財保護審議会会長

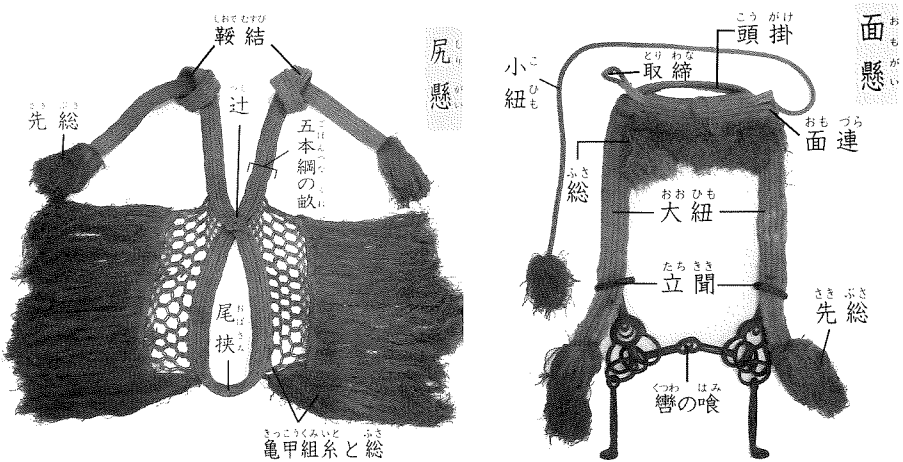
武蔵御嶽神社の旧暦二月八日、暁闇の祭儀に、必ず神馬につけた馬具一式 連銭文の「円文螺鈿鞍」には、双鶴文の紋板の「舌長鎧」と「杏葉形宝珠文」の「轡」、紅花染絹捻糸の亀甲組糸の「三懸」(五本綱鞅一式)、鞍の前輪には「鏡鞍」まで附属します。



胸懸

鎌倉初期十三世紀の古い軍陣鞍で工芸的に優秀で、各部分が基本的に揃う例は他にありません。この中の紅花染絹糸製の亀甲文様の「総」つきの「三懸」五本綱鞅について調査します。「三懸」とは、単に「鞍」ともいい、頭部につける制禦のための面懸、胸と後背で鞍を安定させる胸懸と尻懸の三本の細い平たい帯一組です。馬体に直接装備する帯なので、殊に御嶽の馬具のように武家の軍陣鞍様式は痛みやすく、年代を確定できる伝世品は稀なのです。御嶽で神馬を神事に曳く恒例の二月八日の祭儀

ていて抜けません。享保二二年(一七二七)閏正月一日、吉宗の希望でこの轡を江戸城で上覧に供した時もこの面懸はつけたままであったのです。



尻懸

鉄製の轡共で面懸の重量は200g。胸懸は全長210cm(先総16cm・取締80cm共)で、馬の前胸にあて、左側の取締は鞍の前輪の左の鞍に掛け右の先総のある方は右の鞍に結びます。帯の中央86cmの間は、長40cm亀甲組その下に20cmの総が縫いつけられて垂下します。重量600g。尻懸と共に鞍を安定させます。尻懸は両端の先総各16cm共で全長304cmを二つに折り、尾挟とし尾の根元にかけて、折目は五本綱の帯の綴を解き二本と三本とし、折目より38cmを隔て交叉して辻(組違)とし鮑結に上下の帯の紐を組んで留める。辻から96cmの帯は各々鞍の後輪の左右の鞍に結ぶ。亀甲組と総は約42cmの垂下で辻の8cm先より尾挟まで飾る。重量870g。御嶽の三懸の帯部分は、四

は、万治二年(一六五九)の祭礼帳(久保田家文書)で確認できます。祭礼は、更に古く、その際奉納の「納め太刀」の刻銘から中世末の弘治四年(一五五八)以前に遡れます。鞍笠と一揃いの馬具の伝世品としては最古の例です。

ちなみに久能山東照宮には、徳川家康所用という水干鞍と組む総つきの三懸があり、寛文四年(一六六四)帳簿に記載、重要文化財に指定されています。

この三懸は、御嶽と共通の仕立てで注目されます。御嶽の三懸は早く知られ、寛政一三年(一八〇一)二月四日、松平定信の命で家臣や画師が登山調査した(片柳三郎家・金井家文書)図が『集古十種』馬具部に収載されます。御嶽の三懸には、紅花染の亀甲組糸に総が装飾としてつく「総鞍」で晴れの盛儀の馬装です。御嶽の神の御召しの神馬につけるため、一年に一

つ打(唐打)の丸い木綿芯の組紐(綱)五本を横に綴じて、平組の五本敵に見立てた五本の綱鞅です。平組で敵や菱文を組出す中世の仕様に対して、近世には綱鞅が主流となります。御嶽は、太さの同じ五本綱鞅ですが、久能山の家康の紫染綱鞅は、角八ツ打の太紐三本、細紐四本を交互に並べた七本綱鞅で、先総は御嶽と同じ付総です。

御嶽の五本綱鞅は、厚さ0.9cm、幅4.2cmほどの厚手の平細帯で、例えば尾挟とか、辻、頭掛と面連部分での工作に便利のようです。

石山本願寺旧記『証如上人日記』天文五年(一五三六)二月二二日に「茜綱しりがい十具」とある。天文・弘治の頃御嶽では神馬の曳き馬供奉の二月八日祭礼が行われていたはずで、その頃までに補充されたのがこの三懸でしょう。殊に御嶽の三懸は近世の遺例に比較しても、より小ぶり

度だけ本殿内陣から取り出す大切な神宝だったので。

一方、文献としては、『吾妻鏡』正嘉二年(一二五八)三月一日の鎌倉將軍宗尊親王初めての二所詣の美々しい行列を飾る「随兵(大鎧に弓矢を帶し騎馬で將軍を守護する名門の武士)十二騎」が「総鞍ヲ懸ク」という記事が中世鎌倉武士が晴儀に総鞍を使用した最古の記録です。十二騎には後に御嶽神社を修理した三田氏の先祖三田小太郎の子息五郎も選ばれています。

三懸のうち面懸は、長さ22cmの面連を馬の額にあて、頭上の首掛の左右から大紐の帯、先総12cm共で各49cmをたらずその先に手綱と口取の曳く差繩を結び付ける轡を付け、馬の口にはめまます。面連の端の97cmは反対側の取締にかけて引戻し根元で結び面懸を固定します。面連の厚総は丈が10cmです。轡(鏡板)の立聞に通した大紐は先総がひらい

な仕立てです。久能山の家康所用の三懸も小ぶりです、ほぼ御嶽と同一の寸法です。ごく小さな古風な中世の馬の装具であったと思います。

一年一度、「(御嶽)権現御召」し鞍(黒田家文書・享保五年神宝目録)として神事に供奉するのみなので、保存良好、平成五年の小補修だけですが、中世の糸組の三懸の残る例は皆無です。まして近世初頭に下つても年代想定可能な遺例は稀なのです。

御嶽の円文螺鈿鞍附属の、紅花染五本綱鞅は、中世末の制作ではあっても、鞍・笠と一組で中世の馬装の実際を伝えている貴重な存在です。調査執筆にあたって、西岡文夫氏と古馬術の菅野茂雄氏の学恩を頂いた。馬具の説明は難解なので、御嶽神社宝物殿展示中の実物と、神田忠良氏制作の復元の馬装図を参考にして頂きたいと思えます。